

三遊亭鳳楽さん

昭和の遺志を継ぐ落語家



「お笑いを申し上げます」。人前で話すことが苦手な落語好きの小学生が、座布団を教壇に敷いただけの即興の高座で勇気を振り絞った一席。同級生からの拍手喝采を浴びた瞬間、一人の噺家が誕生した。のちの三遊亭鳳楽さんである。

昭和22年（1947）、埼玉県川越市生まれ。小学一年生の頃、浪曲好きの父親に連れられて行った寄席で落語と出会った。笑いとともに知識を与えてくれる落語が好きで、中学生の頃には落語家になることを心に決めていた。

18歳で故五代目三遊亭円楽さん入門。内弟子をとらない師匠のもと、月7000円の長屋四畳半一間からのスタートだったが、「いろんな人の噺を毎日聞ける。こんないいことはないだろう」と嬉しくてたまらなかった。「師匠に似すぎるのはよくない」という円楽さんの意向で、故七代目立川談志さんなど多くの先輩に稽古をつけてもらったことは、落語家としての基盤になっている。「いいところをとって、自分の考えを入れて、かき混ぜて、組み立てていくんです。そうすると誰にもない個性が生まれてくる」。

昭和53年（1978）、鳳楽さんの大師匠であり昭和の名人、六代目三遊亭圓生さんとその一門は落語協会を抜け、三遊協会を設立した。寄席に出られなくなったことを契機に、「日本全国を寄席にしまおう」と、圓生さんの本当の名人芸を見せる一年間の全国行脚をはじめた。翌年9月のある日、鳳楽さんは「今までにないくらいいの、吸い込まれていきそうな高座だった」と大師匠のかつてないほどの気迫に気付いていた。その会終了後、楽屋で倒れた。享年79歳。その日は奇しくも圓生さんの誕生日、鳳楽さん（当時楽松）の真打披露・「鳳楽」襲名の6日前だった。

落語協会脱会後圓生さんが認めた最初で最後の真打となった鳳楽さんの襲名披露には、圓生さんの逝去直後とい

ひと
物語

二六四

『鳳楽一門会』 2016年3月11日（金）13時30分開演 場所：お江戸日本橋亭
出演者：三遊亭鳳楽、三遊亭楽松、三遊亭鳳志、三遊亭鳳笑、三遊亭鳳月
お問い合わせ：03-3245-1278（お江戸日本橋亭）

うこともあって、他団体からも多く出席。10日間の真打披露では名だたる名人が口上を述べた。嬉しさと同時に、「おまえしっかりしろよ、おれが推挙した真打だぞ。そんな圓生の声が聞こえてくるようで辛くて辛くて」。

その後多くの輝かしい賞を受賞し、今年、五代目円楽一門会・最高顧問となった。それでも、「圓生の足下にも近づきたい」という思いは変わらない。「嘶家は、砂山を上がるがごとく修業する」。忘れられない圓生さんの言葉だ。「怠けてりやずるずるずると下まで落ちちゃう。一生懸命上がりうと思つたつて、現状維持もできません」。さらに、「まだまだやらなきゃいけない落語はいっぱいあります。あたしが圓生から受け継いだものをやらないと。遺産として葬られてしまふことはもつたいない」と、古典の言葉を現代でも理解しやすいように工夫するなど、後世に残していくため日々思索する。「先人たちがやってくれたことから、あたしたちも恩返しでやっていかなくちゃいけないことですからね」。

3月11日にはお江戸日本橋亭にて「鳳楽一門会」を行う。弟子が師匠と同じ高座に上がることができる貴重な機会だ。かつて師匠や大師匠の背中を見て、技を盗み、血肉にしてくれた自分のように、弟子たちが大きく飛躍してくれることを願って、今日も高座へ――。

写真●遠藤拓哉
上野広小路亭にて

